砺波カイニョ倶楽部会報　第45号

平成１９年８月発行　発行者　砺波カイニョ倶楽部　代表幹事　柏樹直樹
事務局　富山県砺波市表町１４－１０　電話　0763－33－6588　　天野一男建築工房内

里山の巨樹と
サイカチ群生地をみる

7 月 14 日(土)午前、里山の巨樹にふれる会を開催し 23 名が参加した。梅雨の最中、少し霧雨にもあったが、計画した現地を見学できた。富山新聞と北日本新聞がその模様を報道した。(7 月 15 日朝刊で)

見学した主な内容は・・・

1　恩光寺スギ（庄川・金剛寺）

恩光寺跡に薬師堂がおかれ、門スギの形をした二本のスギ大古木。言い伝えでは、応永 15 年（1408 年）建立とされ、天正 7 年（1579 年）頃に兵火で朽ち果てた。恩光寺は、その後、福野へ移された。その証として薬師堂と二本のスギが残っている。左側のスギは幹廻り 4.6m、右スギは幹廻り 4.0m。その樹高はいずれも 35m程。左側スギの樹勢は良いが、右木は落雷で割裂腐朽している。樹齢は 500 年～550 年。マスヤマスギではないか。金剛寺地区民の手でまわりのタケ林を取りのぞき、陽が入るようにされていた。

写真――恩光寺スギの下で

写真――恩光寺スギ樹幹

2　合口ダム右側（山手）のサイカチ群生地

地元の金井一朗さんに案内してもらった。サイカチの高木数本が山のスソ部分に成立しているもので、全国でもこうした形の群生地は二カ所ほど。

下に稚樹が結構見られた。崩落地で割合、石礫の多いなかで成立している。マメ科で羽状複葉。サヤは 20 ㎝程でねじれていて、その中に小さい種が 3～4 つ入る。昔はこの葉やサヤも石けんに利用した。また、枝にトゲがあるが、若葉は食用にもなった。

この中にケンポナシも成立していて、そのいわれ等を和田健さんが説明。特徴は、枝から葉のついている形が「右・右」、「左・左」と出ていること。　大変面白い配置に一同驚きながら受け止めた。ナツメと同じ科

写真――合口ダム右岸にサイカチ群生地がある

3　松島大スギ（井波町神明社東側）

井波自然を守る会・大浦進さんに案内してもらった。大浦さんは、子どもの時から見ていて今も全く変わらない壮大な姿を保っていること、四季をとおし色んな形と勢いを見せてくれることを、親しみをこめて説明。幹周り 7.26m、標高 40m、樹齢 500 年。井波城の表門にあたる。

写真――松島大スギのうしろ空洞

4　院瀬見エドヒガンザクラ（井波・院瀬見地内の山手）

これも大浦さんの案内で。スギ林の中にある大サクラ。4 月 10 日頃に満開になる。幹周り 3.5m（県内のサクラで 7 番目）。樹高 28m。水神様の神木としてこの地区の人々が守ってきた。このサクラの特徴は、ガクの下部が丸くふくらみ毛が多い。開花時には、ライトアップされる。

この林内にたくさんあったヨシナとアキギク（クワガラナ）はいずれも農家の野菜が切れるはざかい時に、食用として利用したものだと和田さんが説明。

正午前予定した四カ所の現地見学を終えた。この会に、砺波市中村の「皀惟三」さんが参加されサイカチの群生地と対面された。砺波市内では皀（サイカチ）さんは一軒。現地でその姓のいわれや、昔、たくさんの大木が皀さん宅にあったこと等の話をされた。

写真――院瀬見のエドヒガンの下で説明を聞く

麓の巨木からのメッセージ

先人は平野と山との境にあらゆる生物の「すみか」として、樹木のかたまりを残した。その一部が今に生きる麓の巨樹でそれには霊験な風格も加わり語りかける。きっと先人は生き物の拠点を配置し、それを変化する所との対比のための鏡としたに違いない。今日のように全てをなくし、真新しいものをつくり、それで良しとするやり方は、破壊的で人間の身勝手な行為というものだ。砺波の散居と深くかかわって生きる麓の巨樹にふれることで、先人の智恵や願いを考えてみる。先人はカイニョとの関係を、利害だけで判断してこなかったはずだ。今回ふれた樹木は、カイニョとつ付き合う人間になるための先生・教科書である。参加者の多くは、その巨樹の裸にふれ、沈黙を守り天空をつきさす姿に強い力と励ましを受けた。